

P1-032

非器質性遺糞症の小児に対する心理療法の試み—知能検査(WISC-4)の実施も併せて—

和田 志保、佐藤 あや、虻川 大樹

宮城県立こども病院 成育支援局

【背景】

非器質性遺糞症は小児期に見られる排便障害の一つで、社会通念上ふさわしくない場所（パンツやおむつの中）へ大便を反復して排泄することを指す。小児の排泄の発達は個人差が大きくまた知的障害の有無も影響を及ぼすことから、その実態は詳細には把握されていないのが現状である。東北地方の小児医療の中核病院である当院には「排泄が自立すべき年齢を過ぎても遺糞が続く」を主訴に小児が受診する。それらに対し当院では消化器の精査および投薬を行うとともに、臨床心理士が患児と保護者に親子平行面接にて心理療法を実施している。本発表では、非器質性遺糞症を主訴に受診した患児に対する心理療法の試みについて、知能検査の結果と併せて報告する。

【方法】

2015年1月～2018年12月に心理療法を開始・継続・終了した遺糞症の患児7名（男児6、女児1）を対象に以下のデータを検討した。(1)初診時年齢、(2)初診時主訴、(3)心理療法開始時年齢、(4)心理療法開始理由、(5)WISC-4の全検査IQ、4指標の標準得点、(6)心理療法内容、(7)予後。

【倫理的配慮】

所属機関の倫理審査委員会で承認を得た。

【結果】

(1)初診時平均年齢は6.3歳だった。(2)主訴は複数回答で遺糞7名、便秘6名、遺尿1名だった。(3)心理療法開始の平均年齢は8.4歳だった。(4)心理療法開始の理由は複数回答で「幼少期からの遺糞があり小学生になってからも続いている」が7名、うち「不登校状況」が2名、「発達障害疑い」が2名だった。(5)WISC-4知能検査の全検査IQは平均域1名、平均下位4名、境界域～平均下位2名だった。4指標の標準得点を比較したところ有意差は認められなかった。(6)患児と保護者それぞれに臨床心理士が面接を行い、患児に対しては「トイレで排便する事への励まし」「生活全般の状況把握とストレス対処法の助言」などを行い、保護者に対しては「遺糞対応の困難さへの共感」「知能検査結果に基づいた学習面・生活面での対応の助言」などを行った。(7)7名全員において遺糞は改善した。6名は便秘改善のため現在も通院中である。うち2名は発達障害の専門科へ紹介となった。

【考察】

遺糞は患児のQOLに大きな影響を与え保護者の負担感も大きい。今回、患児に知能検査を実施しその特徴を保護者に伝えることは対応改善に役立ったと考えられる。また心理療法を継続して行うことが患児の成長を促し保護者の負担軽減に寄与したと推察される。

P1-033

遊び発達質問紙を用いた幼児の遊び行動発達の項目反応理論による検討

奈良 進弘¹、井上 和博¹、井上 恵子²、井上 裕也²、田中 洋²¹鹿児島大学 医学部 保健学科²医療法人大進会希望ヶ丘病院

【目的】

幼児期の子どもは、遊びの中で、心身の諸機能を試み、スキルを拡大する。発達支援においては、遊びは有用な指標であり、有益な支援手段でもある。一方、子どもは、様々な題材を用いて多様な遊びを展開するので、遊びの発達は、心身機能の発達と比べ、複雑なものになり、的確に捉えることも難しくなる。そこで、幼児の保護者を対象に、遊び発達質問紙を用いた調査を行い、項目反応理論分析を行い、幼児期の遊び行動発達を検討する。

【方法】

遊び発達質問紙を幼稚園・保育園・こども園の協力を得て保護者に配布し、匿名での回答を求めた。質問紙は、遊びの材料（15項目）と遊び方（57項目）で構成され、「滑り台」や「人形」といった遊びの材料の好みとともに、「滑り台を自分でする」、「人形の洋服の着せ替え」などの遊び方について、「よくする・時々する・しない・前はした」との選択枝を設定した。得られた結果は、1歳から5歳までの年代と男女別の集団毎で分析を行った。「よくする」という回答割合を基に、各群毎に分析対象とする遊び方を定め、次に、項目反応理論分析を行い、それらの遊び方の項目パラメータを算出し、それをその遊び方の「難易度」とした。項目反応理論分析は、統計言語Rとパッケージ「irtosys」を使用し、「1パラメータ・ロジスティックモデル」に基づく最尤推定法を行った。本研究は、発表者所属機関の倫理委員会の承認を得て実施した。記載すべき利益相反は存在しない。

【結果】

遊び発達質問紙は、940部を配布し、709人の保護者からの回答を得た（回収率75%）。1歳から5歳までの女児322名、男児349名についての回答を分析対象とした。調査した遊び方57項目のうち、49項目が項目パラメータの分析対象となり、年代毎では、年長になるにつれて、対象となる遊び方が減少した。ミニカーやテレビゲームでの遊びは男児のみで、人形および髪飾りやリボンを用いた遊びは女児のみで、それぞれ分析対象となった。

【考察】

項目パラメータの値の年代による変化は、分析対象となった遊び方の発達を示すものと考えられた。今後、データ数を増やし、検証する必要があるが、項目反応理論によって導かれた項目パラメータをもとに、遊び方の発達の検討が可能であり、この結果はアセスメントや発達支援などにも利用できると考えられた。